

ワークプレイス計画段階における ユーザー参加型ワークショップに関する研究

五十嵐 貴子*1 ○中野 健太*2
松本 裕司*3 仲 隆介*4

キーワード：ワークプレイス ユーザー参加 ワークショップ 建築計画 ケーススタディ

1. 研究の背景と目的

社会・経営環境の変化を背景に、これまで主流とされていた一般的な仕事のやり方は再考を迫られ、ワーカースは行動や価値観を自ら変化させることが求められている^[1]。そのためワークプレイスは、ワーカースを支援するものとして、より一層ワーカースの働き方に根差すことが必要であると考えられるが、現状のワークプレイスづくりにワーカースが関与することは少ないと言える^[注1]。

そこで本研究では、ワークプレイス計画段階におけるユーザー参加型ワークショップに着目し、筆者が参加した長崎県庁舎建設ワーキンググループ(以下ワーキングと表記)をケーススタディとして取り上げる。ワーキングの活動状況とメンバーの発言内容の分析から、今後のワークプレイス計画段階におけるユーザー参加型ワークショップに寄与する知見の導出を目指す^[注2]。

2. ワーキングの活動状況

2.1 ワーキングの概要

ワーキングは長崎県庁舎建設プロジェクト(以下建設プロジェクト)の末端に位置付けられている(図1)。

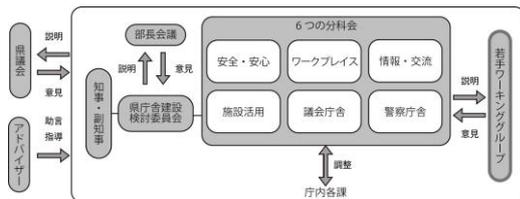


図1 建設プロジェクトの推進体制

表1 調査対象期間(ターム)と建設プロジェクトの動き

年度	ターム	建設プロジェクト	ワーキング
H21	1年目 H21.09.08 ~ H22.03.31	03月 新体制就任	09月 ワーキンググループ発足 09月 本研究チーム参加
	2年目 H22.04.01 ~ H23.04.15	04月 パブリックコメント実施 07月 「県民の意見を聴く会」開催 12月 新たな行政改革に関する計画 発行 03月 東日本大震災による一時見合わせ	04月 メンバー編成
H23	3年目前半 H23.06.24 ~ H24.01.30	04月 県庁舎建設副名称変更 12月 プログラミング業務開始	06月 メンバー編成 01月 メンバー編成 01月 プログラミング業者介入
	3年目後半 H24.01.31 ~ H24.06.04	03月 基本設計開始	06月 プログラミング業者介入終了

調査対象期間と建設プロジェクトの動きを表1に示す。ワーキングは年度ごとに活動していたが、震災の影響

による活動開始の遅延や、プログラミング^[注3]委託業者の介入など、変則的な動きがあったため、調査対象期間を4つのタームに区切った。

タームごとに方針づけられた、ワーキングの目的と検討内容を表2に示す。4タームの間に活動目的や活動内容は変化しながらも、ワーキングの活動が継続していたことや、プログラミングの場に活用されていたことから、建設プロジェクトにおいてワーキングの有効性は認められていたと考えられる。

表2 ターム別にみたワーキングの目的と検討内容

ターム	目的	検討内容
1年目	県庁舎整備基本構想 ^[注4] の策定にあたり、庁舎を利用する見地から意見を広く求め検討の参考とするため、職員によるワーキング設置	基本構想案の策定まで(2010年3月末)
2年目	1年目の反省	県庁舎整備に関する事項→執務環境、セキュリティ、福利厚生、交流機能 ※会議の都度、テーマを決めて意見交換を行う。 ・対象である「県民」の、具体的な姿が見えづかった。 ・ハード面以外の課題の深堀が不足していた。 ・課題の深堀不足のため、望ましい機能がかけ離れていた。
3年目前半	検討内容	サービス対象相手である県民とは誰かを具体的に検証 →県民のニーズと、ニーズを満たす理想の「働き方」を検討する。 →現状と比較し、望ましい建物機能を検討する。
3年目後半	活動目的と検討内容	コンセプトブック ^[注5] に対するワーキング外の意見を受け目標を設定 ・各部門のオフィスの理想像 ・共創スペースに求められる機器や制度のイメージ

表3 ワーキングの組織体制

体制	内容	概要
運営体制	内部運営メンバー	県庁舎建設課 ^[注6] の若手職員(4名) ^[注7]
	外部協力体制	本研究チーム
メンバー構成	人数	1年目:20名;2年目:18名;3年目前半:19名;3年目後半:25名
	職種	約半数のメンバーが1タームだけの参加に留まっていた
メンバー構成	職種	事務、技術からの参加があったが、各年共通して、8割は事務であり、技術系は各職種1名程度であった
	職位 ^[注11]	一般、主任、係長が参加、全年通して主任が7割強で最多
	性別	各年、男7:女3の割合、1年目のみ男6:女4であった
メンバー構成	所屬部	1年目~3年目前半までは、県庁に存在する全19部署のうち半数程度からの参加であったが、3年目後半は18部署からの参加があった

組織体制を運営体制とメンバー構成から整理する。運営体制については内部・外部別に、メンバー構成については人数、継続ターム、職種、職位、性別から特徴をまとめた(表3)。ワーキングは、内部運営メンバーと外部協力体制の協働で運営されていた。また、メンバーは運営メンバーも含め若手職員を中心に構成されていた。

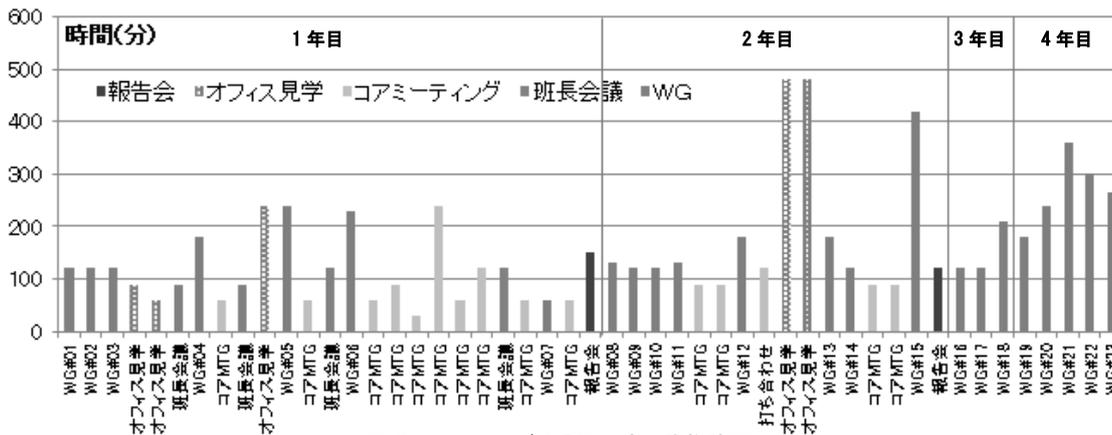


図2 ワーキングの活動内容と実施時間

○ ワーキングの活動内容

ワーキングの活動を内容別に、ワーキンググループ会議（以下WGと表記し#は回数を示す）、非公式ミーティング、オフィス見学、報告会に分類した。活動内容と実施時間を図2に、ワーキングの活動の様子を図3に示す。



図3 ワーキングの活動の様子

表4 ワーキングの活動

ワーキンググループ会議(以下WGと表記。#は回数を表す)	23回			
メンバーが集まって話し合うワーキンググループの主な活動。WGを、その回の実施目的別に3つのタイプに分別した。 報告・連絡型(3回):建設プロジェクトの経過の説明、メンバーによる自己紹介や決意表明が中心。県庁管理職や外部専門家がワーキングの活動に対する想いが語られることもあった。 意見伺い型(5回):WG外で検討された方針や資料のたたき台に対する意見伺い。 ワークショップ型(15回):WGの中心的な活動。				
非公式ミーティング	19回			
特定のメンバーがWG外で行っていたミーティングで、班長会議とコアミーティングがあった。 班長会議(4回):1年目に存在した班制度において、6つの班の班長が次回WGまでの間に集まり、主に次回WGの議題を検討していた。班長は、各班員の意見を集約し会議に臨んでいた。 コアミーティング(14回):ターム末の活動報告書作成を目的に運営メンバー2名と運営メンバーが選定したメンバー2名が活動していた。				
オフィス見学	3回			
先進事例の視察に計3回出向いた。視察先を以下に示す。				
平成21年11月16、18日	ジャパネットたかた アリコジャパン	平成22年12月6-7日	アルプス電気 TBWA/HAKUHODO	6(18)
平成21年12月24日	NECネットエスアイ ココヨ 国土交通省かすみがせき保育園	不明	ココヨ Google	3(18)

ワーキンググループ会議、非公式ミーティング、オフィス見学についての概要を表4にまとめて示す。1年目に非公式ミーティングが活発に行われていた。オフィス

見学は遠方出張となるため、参加率が低かった。

2.2 WGの実施状況

計23回のWGについて、実施時間と参加率・参加メンバー・開催間隔を整理しWGの実施状況を把握する。

○実施時間と参加率

実施時間は120分が標準であった。実施時間と参加率は反比例の傾向にあり、ターム末に向かうにつれて、参加率は減少し実施時間は増加する傾向にある(図4)。参加率減少の要因として、2年目にメンバーから聴取した活動に対する反省点から以下の問題点が考えられる。

- ・ゴールやプロセスが共有できていないため、モチベーションが継続しない。
- ・会議と会議に間が空くため、議論の継続性が感じられない。
- ・意見を出すだけ感があり、責任感に乏しい。
- ・職場で応援してもらえる雰囲気薄い。

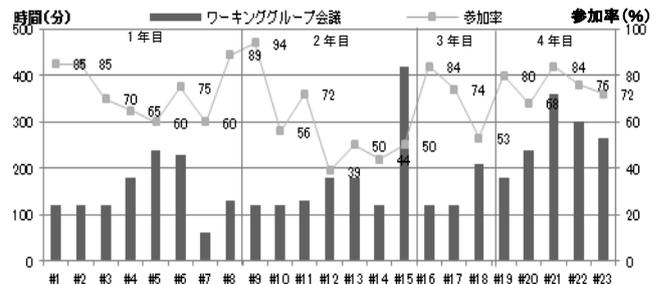


図4 WGの実施時間と参加率

2年目の参加率が特に低い要因として、表1に示した平成22年度7月の「県民の意見を聴く会」の結果や、平成21年度3月の新知事就任による建設見直しの可能性がメンバーのモチベーションに影響を与えていた可能性があると考えられる。

○参加メンバー

職位について、3年目後半における「一般」が他の年と比較して低下傾向がみられないことから、若手のモチベーション向上が伺える(図5)。また、男女別参加者の推移から、2年目の参加率低下は女性の参加率が関係していたと言える(図6)。

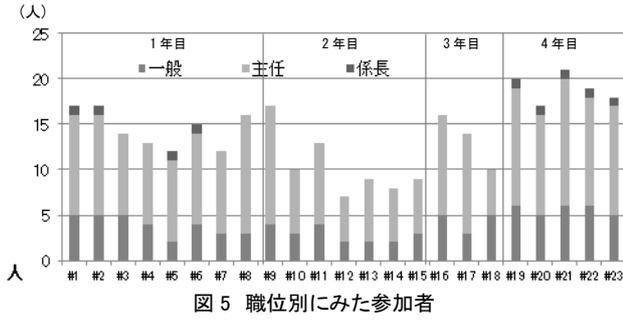


図5 職位別にみた参加者

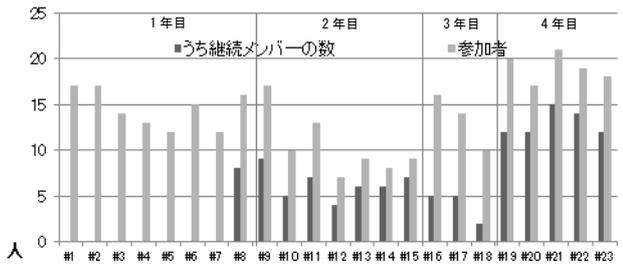


図6 WG別継続メンバーの参加内訳

○開催間隔

ターム別にみると、1年目は次回開催まで1か月未満のWGが5/7回と多く、密にWGが行われていた。2年目、3年目前半は次回開催まで1か月以上のWGがそれぞれ5/7回、3/3回であった。2年目は、先に述べた新知事就任による建設見直しが運営メンバーのモチベーションにも影響していたと考えられる。3年目前半は、地震の影響でプロジェクトのスケジュールがずれ込み、本来予定されていなかったプログラミング業務が発注されたため、この期間に実施予定のWGがプログラミング業務と重複する恐れがあり、間隔が開いたと考えられる。

2.3 実施形式と実施テーマの整理

3節の発言の内容分析に先立ち、分析対象となる22のWGテーマ^{注11)}について「実施形式」と「実施テーマ」という分析視点を与えた。

表5 WGの実施形式と実施テーマ

ターム	WGテーマ	実施形式			実施テーマ			
		話し合いの形式 参加形式 討議形式	手法	宿題	対象	作成者	場所制約	課題制約
1年目	WG#01	グループ ディスカッション		無	外部	WG	-	-
	WG#02①	全体 ディスカッション		無	内部	県庁舎	執務環境	有
	WG#02②	グループ プレスト		無	外部	県庁舎	執務環境	無
	WG#03	グループ ディスカッション	職場観察	無	外部	県庁舎	執務環境	無
	WG#04①	全体 ディスカッション		無	内部	県庁舎	交流環境	無
	WG#04②	グループ プレスト	フレインライティング	無	外部	県庁舎	無	無
2年目	WG#05①	全体 ディスカッション		無	内部	県庁舎	交流環境	無
	WG#05②	グループ ディスカッション	図面ディスカッション	無	内部	県庁舎	執務環境	無
	WG#06	全体 ディスカッション		無	内部	県庁舎	両方	有
	WG#09①	全体 スピーチ		無	内部	県庁舎	無	無
	WG#09②	全体 ディスカッション		無	内部	県庁舎	無	無
	WG#10	グループ プレスト	ワールドカフェ	無	内部	県庁舎	無	有
3年目	WG#11	グループ プレスト	ワールドカフェ	無	内部	県庁舎	無	有
	WG#12①	グループ プレスト		有	外部	県庁舎	無	無
	WG#12②	グループ プレスト		無	内部	県庁舎	無	無
	WG#14	グループ プレスト		有	内部	県庁舎	無	有
	WG#17	グループ プレスト		有	内部	県庁舎	無	無
	WG#18	グループ プレスト		有	内部	県庁舎	無	無
3年目後半	WG#20①	グループ ディスカッション		有	外部	県庁舎	無	有
	WG#20②	グループ ディスカッション	成果物作成	無	外部	県庁舎	無	有
	WG#21	グループ ディスカッション	成果物作成	有	外部	県庁舎	両方	有
	WG#22	グループ ディスカッション	成果物作成	無	外部	県庁舎	両方	有

実施形式は、話し合いの形式、WGを盛り上げる手法、宿題の有無から整理した。話し合いの形式は参加形式(全体、グループ)と討議形式(ディスカッション、プレスト、スピーチ)から成る。実施テーマについては、対象、作成者、制約という視点から整理した(表5)。

3. 発言内容の分析

各テーマで出された意見やポストイット等のアイデアをメンバーの発言としてその内容を分析する。

3.1 分析基礎データのチャンク分け

分析対象となる1657発言をプロトコル分析の手順^[2]を参考にチャンク分けし(図7)、合計2734の分析基礎データを、各カテゴリについてそれぞれ分類した(表6)。もともとなる完結した一つの発言を「結論」「理由」「補足説明」のいずれかに分類し、チャンクとして区切る。一つの発言に「結論」は必ず一つ存在するが、理由、補足説明は存在数を問わない。

<例文>新庁舎へ移動する際、机などがバラバラだとデザイン的におかしい。佐世保の保健所が建物は新しいのに古い机を入れており、見た目が悪い。イメージとしては、備品は準備し、人だけを動かすのが良いのではないかと。

理由	新庁舎へ移動する際、机などがバラバラだとデザイン的におかしい。
補足説明	佐世保の保健所が建物は新しいのに古い机を入れており、見た目が悪い。
結論	イメージとしては、備品は準備し、人だけを動かすのが良いのではないかと。

図7 チャンク区切りのルール
表6 カテゴリー一覧

カテゴリ		タグ	
意味		評価 要求・提案・アイデア	
対象		スタイル スペース ツール	
対象の細分類	スタイル	ワークライフ	働く場所・働く時間 育児・介護関係 評価方法 その他
		情報管理・セキュリティ	建物・空間 紙・文書・データ モノ その他
	スペース	執務エリア	OAコーナー 集中個室・ブース 会議・打ち合わせ リフレッシュ ライブラリ 倉庫・書庫 執務室全体 自席まわり 応接 管理職 未特定 その他
		共用エリア	会議・打ち合わせ 応接 エントランス 食堂・売店・喫茶 情報コーナー 展望施設 相談室 窓口 受付 ライブラリ 廊下 トイレ 未特定 その他
		その他エリア	議会 屋外 未特定 その他
		未特定	
	ツール	アナログ	人間 イベント・制度 モノ その他
	デジタル	PC・ネットワーク OA機器 その他	
対象の視点	スタイル	全庁・組織間 組織内・個人間 個人 県民 その他	
	スペース	建築 レイアウト 家具 その他	
	ツール	共有 発信 業務効率 その他	
対象の内容	スタイル	制度・仕組み 文化・慣習 活動 その他	
	スペース	機能・デザイン 動線・スタッキング ゾーンニング 量 建築設備 使い方 その他	
	ツール	数 機能・デザイン 使い方 その他	
時間軸		未来 現在 過去	

3.2 発言内容の分析と考察

発言数と結論の意味、結論の対象、理由の対象について、結果をグラフ化し特徴と考察を述べる。

○発言数と結論の意味

- 1) 3年目後半のWG#20①での発言が特に多い(図8)。
- 2) 1年目は発言が多い回と少ない回でばらついている(図8)。

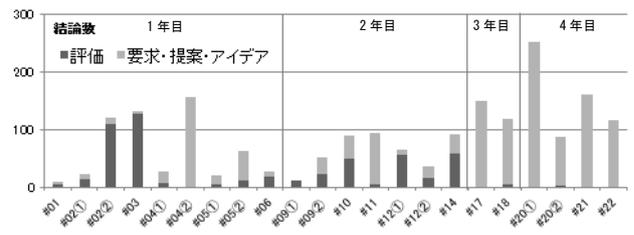


図8 結論の意味内訳

考察

1) WG#20①では、コンセプトブックに記載された「23のN行動」の具体化を試みていた。ここでの発言が特に多かったということは、その後の設計と条件に関する「要求・提案・アイデア」のベースがうまく構築されていたと考えられ、その一要因として、コンセプトブックの存在が考えられる。コンセプトブックは2年目の議論をまとめた理想のワークスタイルの指針である。コンセプトブック完成前後の1回あたりの発言数を比較すると、完成前が約66発言であるのに対して、完成後は約72発言と増加していた。このことから、コンセプトブックがその後におけるメンバーの発言の指針となっていた可能性があると考えられる。

2) 発言数が少ないテーマは、WG#01を除いて話し合いの形式がすべて「全体×ディスカッション」であり、テーマの作成者が内部であった（表6）。このことから、発言の少ないテーマは、班長会議で検討された事項に対する意見伺いであったため、あまり発言がなされなかったと考えられる。しかし、発言の数は少ないが班内、班長会議で既に検討されたことについて、改めて全体で議論する場であったため、数が少ないからといって検討が活発でなかったとは言えない。

○結論の対象について

- 1) 1年目はスペースが多く、2年目はスタイルが増加している。3年目後半のWG#20①をピークにスタイルが減少しており、その後はスペースが増加している（図9）。
- 2) 対象がスタイルであるものを細かく見ると、1年目は、情報管理・セキュリティが多く、2、3年目は仕事が多い（図10）。
- 3) スタイルの中で2、3年目において多かった仕事をさらに細かく見ると、WG#14でやり方が多い（図11）。

考察

1) 1年目は場所制約有のテーマが多く（表5）、特定のスペースについて意見を出していたと考えられる。

1)～3) すべてに共通する2年目のスタイルが増加している点に関しては、1年目の反省が反映された結果であると考えられる。1年目はメンバーが県庁の仕事と県民の接点を具体的に考えられない状態であり、2年目は改めて県庁の働き方を考え直す方針となっていた。そのため、2、3年目は仕事のやり方についての発言が多かったと考えられる。WG#20①がスタイルの発言数のピークとなり、その後スペースについての発言が増加していることについて、WG#20①で出された理想のスタイル（アクティビティ）をベースに、#20②、#21、#22において

スペースとスタイルの関連付けがなされていたと考えられる。

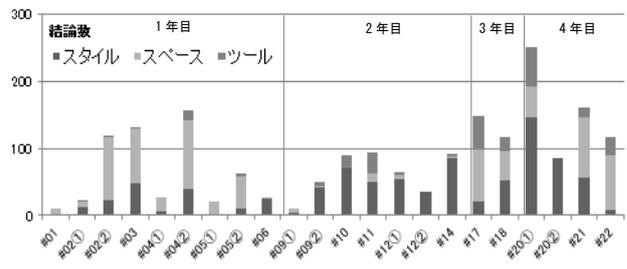


図9 結論の対象

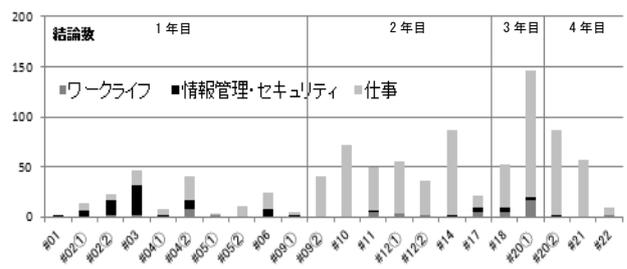


図10 結論の対象が「スタイル」であるものの細分類

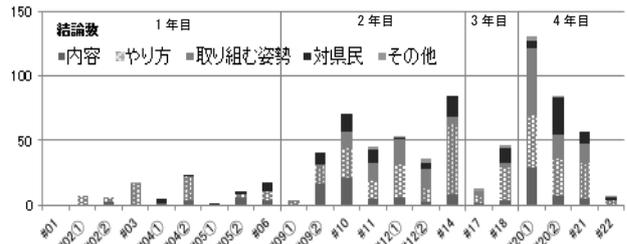


図11 結論の対象が「スタイル」の「仕事」であるものの細分類

○理由の対象について

- 1) WG#03において「スペース」が多い（図12）。
- 2) 2年目以降WG#12①、14、17、18において理由が存在し、「スタイル」が多い（図12）。

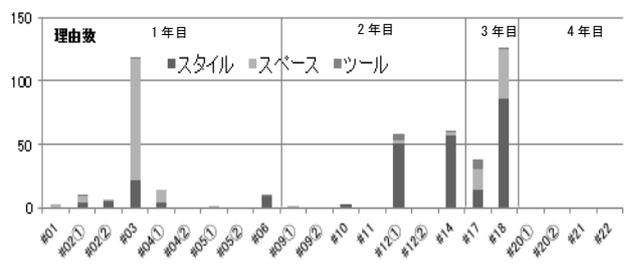


図12 理由の対象

考察

1) WG#03では、各職場を視察して執務環境の課題出しを行っていた。WG#02②では同テーマでプレストを行っていたが、理由はほとんど存在しない。このことから、メンバー間でお互いの職場を視察し合うことで、改めて現状を把握し、現状のスペースの課題とその要因を考察しながら発言していたと考えられる。

2) WG#12①, 14, 17, 18 の共通点として、宿題が存在していた(表5)。メンバーは、通常の業務においてブレインストーミングやディスカッションを行う機会がほとんどなく、自分の考えやアイデア等を出すことに慣れていなかった。そのため、2年目以降はWGの1~2週間ほど前に、運営メンバーがメンバーに対して、次回実施予定のテーマに対する意見をあらかじめ連絡し、事前に宿題を出題していた。宿題によってメンバーが事前テーマを深く考えることができた可能性がある。WG#12①では、メンバーの県庁の仕事における過去の成功・失敗経験の共有から現状の課題を深堀しており、メンバーは現状の課題をこれまで以上にリアルに考えることができていた。このテーマがきっかけとなり、その後のテーマでも自らの経験に基づく発言が増加したと考えられる。

行動	活動やワークスタイルのあるべき姿の具体的な内容(活動)	自部署/全体	実施するときの課題
1-1. 意見の声を集める	・会議、雑談、投票等を通じて自由な形で受け付け、議論の場を確保する。 ・意見が出たテーマについて意見を聞く。 ・異なる思いだけでなく、具体的なアイデアを聞く。 ・1対1の意見交換にリアクション(両方向)し、検討や実践の状況も共有する。	自部署 全体	・実行計画等の業務に関する知識の不足。 ・よき知見を受け付けられる場合がある。 ・協議から実務に結びついていく必要がある。
1-2. 意見を呼び込む	・学生サークルなどの地域活動団体と協働し、各地域における取組の広がりを目指す。 ・意見交換やワークショップを開催する。 ・展示やイベントを連日開催する。 ・県庁舎を会場として、市民役場が地域住民と協働で地域の課題を解決する。	全体 自部署 全体	・意見への理解が、市民の知識や資質の醸成が困難。 ・協働する団体が見つかる、同じ目標に集中する。 ・協議の能力が必要。 ・協議、十分な企画力が必要。
1-3. 議論の方向性	・職員が地域活動に参加し、地域に馴染むことにより、当該地域住民が抱える課題を持つようになる。 ・職員にボランティア活動させる事業を実施する。	全体	・職員の意識の向上、活動時間の確保。 ・活動を通じて得た感想等を積極的に反映させる仕組みづくり。
1-4. 庁内を歩いている	・気軽に他部署に出向く。担当者自身の経験や知識の共有を行う。	全体	・他部署内で感想しても、他の職員の間には伝わりづらい可能性がある。
1-5. 気分を変えて考えたい	・屋外や自然環境の良い場所で考える。	全体	・意見を整理してほしい。
1-6. 出会う	・多くの情報や意見、空想、疑問、課題に直面した研究者などへの対応を通して人間関係を築く。	全体	・課題対応や他職員とのコミュニケーションが難しくなる。 ・情報等の管理。

図13 宿題フォーマット例

4 まとめ

本研究で得た知見の中で一般的にも有用であると考えられるものを以下にまとめる。

- ・WG ははじめスペースをメインとした議論であったが、途中からスタイルにシフトしていた。
- ・理想のワークスタイルは指針としてまとめられていた。設計と条件の作成は、指針のアクティビティ化から試みており、その後、スペースとアクティビティの関係性が検討されていた。
- ・ワークスタイルの指針と、設計と条件は個人の経験に基づいた具体的な発言を参考に作成されていた。
- ・ワークショップの事前宿題は、発言の量と質(提案と根拠の関連付け)を向上させていた傾向があった。
- ・ユーザーの発言はワークショップのテーマや話し合いの方法によって左右されていた。

本研究では、計画段階におけるユーザー参加型ワークショップの意義にユーザーの価値意識形成も含まれることを主張した。しかしながら、本研究で行ったケース

スタディの活動状況整理と、発言内容の分析のみでは、ユーザーの価値意識形成を考察することが難しかった。今後の展望として、ワーキングに参加したメンバーに対するアンケートやヒアリング等により、ワーキングがメンバーの価値意識にどのような影響を与えていたのかを把握することが求められる。

[補注]

- 注1) 実務におけるケーススタディの位置づけを把握するために、過去5カ年分(2007年~2012年)の日報・ニューオフィス賞応募オフィス250件を調査対象として、ワークプレイス計画段階の組織体制を調査した結果、ケーススタディの組織体制(社内プロジェクトチーム+オフィス計画者)と異なる社外チームが数年にわたり長期間ワークプレイス検討することは、実務現場でのスタンダードであると言いきることがわかった。
- 注2) 本研究は以下3点をもとに研究を進める。①ワーキングの配布資料や議事録②運営メンバーへのヒアリング(対象者:主要運営メンバー1名、日時:2012年12月28日 16時30分~17時30分@長崎県庁県庁舎建設課)③筆者の参加経験
- 注3) 建築におけるプログラミング業務は、プログラミングには明確な定義が存在せず、業務内容も明確ではないが、実務の上では、設計者以外の者が様々な角度から計画予定の建築物に関する情報を調査し、その成果を設計と条件として設計者に渡すことである。そして、その業務の仲間にユーザーとのワークショップから、ユーザーの意見を聴きだすというプロセスが存在する場合があり、本ケーススタディでは、その場としてワーキングが選ばれた。
- 注4) 長崎県庁舎整備に向けて、平成23年2月に策定・公表された提言書
- 注5) ワーキングの活動をまとめた提言であり、1年目、2年目に出された1年目:県庁舎基本構想ワーキンググループ提言(H22.2.17)、2年目:コンセプトブック(H23.4.15)は設計プロポーザルの副読本として利用された。
- 注6) 県庁舎建設プロジェクトを主たる業務としており、庁内の調整役としてプロジェクトを中心的に運営している。平成23年4月以前は「県庁舎基本構想策定室」。
- 注7) 平成23年4月以前は、若手職員2名により運営されていた。
- 注8) ワークスタイル変革、建築期間、プログラミング、建築設計、都市計画、オフィス・家具計画等のバックグラウンドを持つ1社内で結成された専門チーム。
- 注9) #19(2012/01/31)、#20(2012/02/24)、#21(2012/3/15)、#22(2012/3/16)、#23(2012/06/04)のうち#21~#22は合宿であり、本来は計4回であるが、出席率が違うため、本研究では2日を各1回のWGとしてカウントすることとした。
- 注10) 職名は、一般:主事・技師、主任:主任主事、主任技師、係長で分類した。
- 注11) 全23回のWG、全31テーマのうち、発言データを成果物について検討されているテーマ(WG#13、WG#15、WG#16、WG#23、WG#07)とWGそのものについて(WG#08、WG#16)データを入手できなかった(WG#19)の計9テーマは分析対象外とした。

[参考文献]

- [1] 刈宿俊文 佐伯胖 高木光太郎 (2012)『ワークショップと学び 2 場づくりとしてのまなび』東京大学出版会
- [2] 海保博之・原田悦子(編)、「プロトコル分析入門 発話データから何を讀むか」、新曜社、1993
- [3] ユーリア・エンゲストローム (1999)『拡張による学習 活動理論からのアプローチ』新曜社
- [4] 佐伯胖(1977)『「学び」の構造』東洋館出版社
- [5] 乾亨, 延藤安弘, 森永良丙, 「価値づくりの計画プロセスにおける住み手の計画側への役割の浸透: ユーコートの計画プロセスにおける住み手とコーディネーターの相互浸透性」1)日本建築学会計画系論文報告集、1993 日本建築学会計画系論文報告集 (446), 53-63, 1993-04-30
- [6] 後藤友希, 門内輝行, 「まちづくり活動におけるソーシャル・キャピタルとしての社会ネットワークの研究: 京都市修徳学区を事例として」Design シンポジウム 2012 講演論文集, pp.399-406, 2012.10.

*1 三機工業株式会社 修士 (工学)

*2 京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科 博士前期課程

*3 京都工芸繊維大学デザイン経営工学部門・新世代オフィス研究センター 助教 博士 (学術)

*4 京都工芸繊維大学デザイン経営工学部門・新世代オフィス研究センター 教授 博士 (学術)

Action research on participatory workplace planning's workshop

Takako IGARASHI*¹ ○Kenta NAKANO*²
Yuji MATSUMOTO*³ Ryusuke NAKA*⁴

Keywords : Workplace, User Participation, Workshop, Architectural Planning, Case Study

Purpose

This paper attempts to focus on participatory of workplace planning's workshop. The purpose of this study is to acquire the knowledge that is useful for the user participation type of workshop in a workplace planning phase by arranging and considering activity of Nagasaki prefectural office building construction workgroup in which the author involved as participatory researcher.

Methods

The Research method in this study are as follows.

1. The relationship between a workgroup and a construction project was arranged. Then, the workgroup was positioned in the construction project.
2. The workgroup conference which is the core activities among activities made for the workgroup was focused and the situation was arranged in detail.
3. The contents that was made from utterance of an opinion, ideas and etc. during the workgroup meeting were analyzed.

Conclusion

As results from analysis, the conclusions are as follows.

- (1) The workshop theme was regarding workspace at first, however, it shifted into workstyle in the middle of workshop, and over the time the theme was considering about ideal workstyle.
- (2) The ideal work style was summarized as an indicator. The requirement of creation condition was tried from activities of the indicator, and the relationship of between space and activity was examined.
- (3) The indicator of the ideal work style and requirement of creation were created by reference to the concrete utterance based on individual's experience.
- (4) The prior homework of the workshop was tending to raise the quantity of an utterance and its quality. The user's utterance was influenced by the workshop theme or the method of talks.
- (5) The users' utterances were influenced by the theme of a workshop and the method of talks.

In this research, it claimed that a user's formation of value attitude was also included in the meaning of the user participation type of workshop in a planning phase. However, it was difficult to consider a user's formation of value attitude only by the activity condition arrangement of a case study and the analysis of the contents of an utterance which were conducted by this research. As a future view comprehending what kind of influence working had had on a member's value attitude by the questionnaire to the member who participated in working, or a hearing is called for.

*1 Sanki Engineering Co., Ltd., M.Eng.

*2 Graduate student, Kyoto Institute of Technology

*3 Assistant Prof., Dept. of Design Engineering and Management, Kyoto Institute of Technology, Ph. D.

*4 Prof., Dept. of Design Engineering and Management, Kyoto Institute of Technology, Ph. D.